

# はじめに

かつての学生たちにとって、芸術は日常生活から縁遠いものではなく、自分の感性を表現する身近な手段の一つでした。特にことばによる芸術はごく一般的な表現形式であり、多くの学生たちは時々の情感や感興を詩に込め、あるいは日々の心覚えとして歌を詠みました。『きけ わだつみのこえ』第一集・第二集にも、戦没学生の心情をあらわすものとして多くの詩歌が収録されており、また、わだつみのこえ記念館の常設展でも、浅見有一の歌などを展示しています。そこからは、当時の人々が否応なく意識せざるをえなかった戦争の色濃い影を見てとることができます。

この企画展は、わだつみのこえ記念館が収集した戦没学生の遺稿から、常設展示を行っていないものを中心に、戦争の時代を生き、あるいは戦場に身を置いた体験を結晶させた文芸・芸術作品をとりあげます（一部複写を含む）。芸術の道を志した者が精魂を傾けた完成度の高い作品だけでなく、破格の作品も多く含まれますが、選び抜かれた短いことばの芸術は、論理的に構成された散文とはまた異なる鮮烈な印象を与えます。戦争の時代における戦没学生の心境、戦争を若者の立場からどのように考え、立ち向かい、自分の将来を展望していたのか、といったことをそこから読みとっていただきたいと思います。

認定 NPO 法人 わだつみのこえ記念館

2018年 11月

---

## 凡 例

.....



# 渡辺 直己



1908年(明治41)6月4日生。  
 広島県出身。  
 26年(大正15)4月、広島高等師範学校  
 文科第一部国漢学科入学。  
 30年(昭和5)3月、広島高等師範学校  
 卒業。  
 31年2月、幹部候補生として陸軍広島  
 歩兵第11連隊に入営、同11月除隊。  
 31年12月、呉市立高等女学校教諭に  
 なる。  
 35年1月、アララギ会入会。  
 37年7月、充員召集により、陸軍広島  
 歩兵第11連隊補充隊に入営。  
 37年11月、天津着。  
 38年7月、天津から華中に転戦。同年  
 12月、天津に戻る。  
 39年8月21日、官舎の浸水による石灰  
 爆破により死亡。戦死扱いとなる。  
 享年31歳。

## 渡辺直己『陣中日記』

一九三七年十一月三日〜一九三八年一月三一日

陣中日記  
 一九三七年十一月三日  
 昨夜は大雨となり、道路が水浸しとなり、歩行が困難な状態に陥り、隊内では、雨具を共有し、互いに助け合っていた。また、食糧も不足気味で、野菜はほとんど食べられず、肉類もほとんどない状態であった。隊員たちは、雨をしのぎながら、前進を続けていた。夜は、陣中泊となり、陣地を固く守っていた。翌朝、雨は止んだが、道路は泥濘となり、歩行が非常に困難であった。隊員たちは、泥濘を踏み分けながら、前進を続けた。また、敵軍の活動も観察された。敵軍は、我々の陣地を監視しており、時々砲撃も行っていた。我々の陣地は、砲撃に耐え、無事であった。夜は、陣中泊となり、陣地を固く守っていた。翌朝、雨は止んだが、道路は泥濘となり、歩行が非常に困難であった。隊員たちは、泥濘を踏み分けながら、前進を続けた。また、敵軍の活動も観察された。敵軍は、我々の陣地を監視しており、時々砲撃も行っていた。我々の陣地は、砲撃に耐え、無事であった。

陣中日記  
 一九三八年一月三一日  
 今日、敵軍の砲撃が激しく、陣地が陥ちた。我々の陣地は、砲撃に耐え、無事であった。夜は、陣中泊となり、陣地を固く守っていた。翌朝、雨は止んだが、道路は泥濘となり、歩行が非常に困難であった。隊員たちは、泥濘を踏み分けながら、前進を続けた。また、敵軍の活動も観察された。敵軍は、我々の陣地を監視しており、時々砲撃も行っていた。我々の陣地は、砲撃に耐え、無事であった。

陣中日記  
 一九三八年一月三一日  
 今日、敵軍の砲撃が激しく、陣地が陥ちた。我々の陣地は、砲撃に耐え、無事であった。夜は、陣中泊となり、陣地を固く守っていた。翌朝、雨は止んだが、道路は泥濘となり、歩行が非常に困難であった。隊員たちは、泥濘を踏み分けながら、前進を続けた。また、敵軍の活動も観察された。敵軍は、我々の陣地を監視しており、時々砲撃も行っていた。我々の陣地は、砲撃に耐え、無事であった。

- 脚ツ ○ 志却と無奮との音も戦平心道に付時味下る昔空あり
- 修濤下る戦の幻覚に悩む夜は酒のみを長とことととをまぬ
- 突入せし新鎮城門には雲霧棲すこせ勝 一と血潮が流氷を流す
- 最近すまの足下に散珠の湯茶まつゆく見ましし時
- 樟林の小上ト踏一と草衣をまきこ此夜に息吹やる攻陣が怪けよ
- 凍り下る氷筒の氷を降り太心酒鉄錘と下がと暮れ下る安車ト
- 子か子面と千房回りの散珍共の映出の物くま(出りゆく)
- 六の夜遺と知り下る朝は赤腫腫とせき下る朝と信つ下りと
- 色も伏一ゆる玉那井ば人目とさふりわか何か城さ知体も水様身木
- 走近き日の湯茶を降りなくと嘆き其の煙る地平に
- 刺す下る珠筆本かり本はこころを果たはさす血と暮かしよるの影けり

- 木下血の海がの奥ふ上載えて鳥群しす足神の道
- 戦鈴りて下し却流は月照は物ほるまあがるおどろくと
- 鉄鬼打る骨が下ら部トと一足トろろに字りと進果とぶつく
- 雲環る地際と飾いて敵隊徒屋にあげれ返りわく云隊あり
- 六の夜あらし新漆布とと煽りて朝吐の中へ煙まてりまて
- 朝聞けし運宜老の戦壁に陽共まてり
- △ 瞬しるる敵隊列は濠政で味の攻めつぬにの書味しし
- いとこの暇と雨のこて書いと遊ぶ
- そのけけの茶華の処が昆明湖へ人雨降る雨の白と白し
- 園を明けつこりし茶華のよかりとて攻華れ居り戦の人をば
- 若葉朱壁トしかけかとして雨降りり心あむか今よりワバ
- 万舞山の石所長と怪き下りせまのさふ山雨降る空と